

# 南京図書館調査報告 — 総括と展望

歌野 博

北陸先端科学技術大学院大学

## 1. はじめに — terra incognita としての中国大陸

交易、交換、贈与、収奪等、一般に書物が国境を越えて移動する原因状況はどうであれ、日本古来の書物群が海外にわたり、全国各地の図書館等に安住の地を見出している例は少なくない。江戸時代の鎖国政策にあって例外的な交易国であったオランダや中国、開国を契機とした英米独仏諸国との交流、明治後期から太平洋戦争の終結まで続いた朝鮮、台湾、中国諸国の植民地支配等、日本の書物の海外への流出を促した歴史的な状況に加え、明治初期から目立って増えてくる訪日外国人たちが個人的な動機で買い集め、母国に持ち帰った分も無視できない。

海外にわたり、所蔵されるに至った日本の書物は、直接に研究資料としての価値を有するものは相対的に少ないとしても、日本の書物の全体的な把握には欠かせないことは自明である以上、包括的な調査の重要性もまた贅言を要しない。近年、この種の調査は活発に行われ、一定の成果が報告されている。

ヨーロッパ諸国に関して、ケンブリッジ大学のピーター・コーニッキ氏を中心にした調査プロジェクトが十年以上前から進められている。大英図書館からギリシャ、ラトヴィア、ウクライナの図書館、博物館に至るまで、21カ国、128機関（1997年現在）に及ぶ、文字通り草の根を分けた悉皆調査である。調査結果は「欧州所在日本古書総目録」データベースに蓄積され、公開される予定である。国文学研究資料館では、国内に加え、ヨーロッパ、アメリカを中心に海外所在の古典籍の調査にも力を入れている。韓国のソウル大学校中央図書館に所蔵される、日本統治下の旧京城帝国大学旧蔵分や朝鮮総督府時代の蔵書を引き継ぐソウル国立図書館の調査が九州大学の研究者の手で三年前から進められている。台湾も故宮図書館、台湾国立図書館、台北大学などに所蔵されている日本図書の状態はおよそ掴めている。

こうした動きの中で、中国大陸に所在する日本古典籍に関しては、ほとんど手つかずの状況にあることは意外というほかになく、日本古典籍の全貌を概観する上で大きな欠落を引きずる結果ともなっている。近年ようやく和刻本漢籍、準漢籍の全国的調査が杭州大学（現浙江大学）日本学研究センターによって、また天津図書館、北京図書館、上海図書館など専ら中国側の日本学研究者の手で調査の鉤が入れられようとしているが、悉皆調査にはほど遠い現状にある。

中国と日本の密接な、幾世紀をも関する歴史的関係からいっても、中国に所在する日本書籍は質、量的に欧米諸国に引けを取らないことは十分予想されることである。岡村啓二『遺された蔵書』には、中国に遺された日本書籍の数について、中国社会科学院日本研究所副所長、膨晋樟氏の「42万冊（63研究機関）」で戦前に在留邦人が戦後に遺していったもので、大部分は「古書」という推定が紹介されている。この数に、公共図書館分を上乗せして、岡村は「7,80万冊」と推定し、「半数近くは戦前期日本の図書館や諸機関が遺していったもの」とする。このあたりから大胆な推測をあえてすれば、江戸時代以前の日本古典籍は、少なく見積もっても数万冊、1万点を下らない、というのはあながちな皮算用でもないと思われる。

「欧州所在日本古書総目録」データベースによれば、日本古典籍の国別所蔵数はイギリスが最も多く約7～8000点、フランス、ベルギーが4～5000点で続く規模であり、中国の1万点は、ヨーロッパ諸国（おそらくはアメリカも）を押さえてトップに躍り出る勢いである。この一事からも、中国は日本古典籍の有望なterra incognita と言えよう。

## 2. 南京図書館調査報告

### a. 南京図書館の沿革・概要

北京図書館、上海図書館に次ぐ中国第三の公共図書館である南京図書館の淵源は、清朝末の1907年に設立された江南図書館にさかのぼる。江南図書館は、1911年の辛亥革命をはさんで幾たびかその名称を変え、今日の南京図書館に至っている。

まず1926年、当時の大学学区制にもとづき第四中山大学図書館、翌年国立中央大学国学図書館に改称された。1929年、大学学区制の廃止に伴い、江蘇省教育庁の直轄下、江蘇省立国学図書館となる。（江蘇省立国学図書館という名称、組織は中華人民共和国成立後も華東軍政委員会の直轄のもとに存続し、1952年、国立南京図書館に統合される。）

一方、1933年、国民党政府教育部により現在の南京市成賢街に国立中央図書館が建設され、江蘇省立国学図書館の蔵書を引き継いだ。1948年、国民党政府の指示により蔵書中の古籍13万冊が台北に移された。1949年、国立中央図書館は南京市軍事管制委員会に接収されることになる。1950年には、文化部文物局及び華東軍政委員会文化部双方の管轄のもと、国立南京図書館として発足した。

1954年、華東軍政委員会が廃止され江蘇省政府が成立したのを受けて、文化部は省レベルの地域を対象にした公共図書館の必要性を認め、国立南京図書館を南京図書館に改称すると共に、江蘇省文化庁の直轄下に置いた。

以上が南京図書館の簡単な沿革である。現在、南京図書館は成賢街、虎踞路、尤幡里の三館を擁している。成賢街にあるのが本館で、主として1949年以降の中文書籍、雑誌類や外国図書、雑誌が所蔵されている。虎踞路は古籍部で古籍善本類を、尤幡里は民国時代の公文書、記録類をそれぞれ所蔵している。全蔵書数は1995年時点で680万冊に及ぶ。

## b. 南京図書館古籍部 — 概況及び整理の現状

南京図書館古籍部は中国全土の公共図書館にあって質、量ともに最前列に属する蔵書を誇っている。清代四大蔵書家の一に数えられる丁氏の八千卷楼蔵書をはじめ、武昌范氏の木樨香館蔵書、常熟趙氏の天放楼、江寧鄧氏の群碧楼等の名家蔵書の一部も所蔵するほか、日本、朝鮮、ベトナム諸国の官版を中心にした古籍文献などの善本1万点、10万冊を含め、総蔵書数は50万点、100万冊に達する。また、1940年代、日中戦争時の汪兆銘傀儡政権の高官であった陳群の蔵書楼「沢存古書」の一部や文化革命中に専門家の収集した文献も含まれる。

これらの古籍善本の整理の状況に関し、現在総目録のデータベース化が進められている。従来のカード目録よりはるかに詳細な書誌項目が盛り込まれ（例えば、「収蔵源流」、つまり蔵書印記も採られている）、現在「子」の部の整理が進行中で完成が待たれるところだが、日文図書は当面除外されているのが残念である。

日文図書については著者、書名のカード目録を頼りにするほかない。しかし、カード目録は長年の経緯を引きずり、現物の所在状況を正確に反映しているとは言い難く、総じて信頼性に欠ける憾みがあるのが現状である。

## c. 実地調査過程

三次にわたって実施した南京図書館古籍部の実地調査の概要は、以下の通りである。

## ・第一次調査

調査期間	1998年10月26日～10月28日
調査者	笠谷和比古・歌野博・雷国山 *南京大留学生
調査方法	日本人名を手がかりにした、著者名カード目録の悉皆検索 該当カードの転写
調査結果	医学書、漢学書を中心とした約173点

## ・第二次調査

調査期間	1999年9月6日～9月11日
調査者	笠谷和比古・歌野博・雷国山・戦暁梅・辻垣晃一
調査方法	書名カード目録の悉皆検索 OPAC検索、著者名カード目録
調査結果	医学書、漢学書を中心とした約200点

## ・第三次調査

調査期間	2000年9月25日～9月27日
調査者	笠谷和比古・王勇・歌野博・雷国山・辻垣晃一・武内恵美子 *傳璇琮・張曉敏先生
調査方法	陸忠海「三百種日版漢籍管窺」付載簡略目録をもとにした現物書誌調査 表紙、序、刊記等のデジタルカメラ撮影
調査結果	和刻漢籍、準漢籍等62点（論語註、医書、仏書等）

三次にわたる調査から南京図書館が所蔵する日本古典籍の概要をうかがえば、量的には200点内外、内容的には医学書、漢学書中心、という第一次、第二次の調査結果を修正するだけの材料はない。第一次、第二次はカード目録による調査の限界があり、前述したようにカード目録と現物との正確な一致は期待できない現状とも併せて、200点がマックスなのかミニマムなのかも当面判断しがたい。第三次で現物の一部（正確な同定は不可能だが第一次、第二次でリストしたものの一部が含まれている）を調査した限りでは、医学書、漢学書中心なる構成を追認することができた。

いずれにしても、以上はほんの概要に過ぎない。個々の現物に即した日本古典籍の検証作業が不可欠であり、南京図書館におけるその整理の状況は、日本から出向いた短期間の調査の限界を告知するに等しいものであった。そこで、現物による検証を通した日本古典籍のより包括的な調査方を南京図書館側に依頼したところ、可能な限り協力するとの回答を得た。既に日本古典籍に関する知識を有する専門スタッフが配され、作業は進行している模様である。

#### d. 八千卷楼蔵書 — 南京図書館における日本古典籍収蔵源流の一

八千卷楼蔵書は丁丙の蔵書楼である。丁丙、字嘉魚、号松生、晩年は松存とも号した。道光12年（1832年）、浙江省の錢塘（現杭縣）に生まれ、光初25年（1889年）に没した。兄の丁申とともに「雙丁」と称される。

丁丙の家は祖父丁国典、父丁英の代より書籍の収集に努め、かなりの規模の蔵書を築いたが、太平天国軍の杭州侵攻がもたらした戦乱で灰燼に帰した。丁丙、丁申兄弟は、父祖の志を引き継ぎ、全家財と情熱を傾け、名だたる蔵書家の散逸した善本古籍の搜索、収集に一身を捧げること30年余に及んだ。粗衣粗食に甘んじ、自らの生活は極端に切りつめながら、これはという善本には金に糸目を付けずに買い取り、売却を謝絶された古書は借り受けて鈔本に仕立てるという（「雪鈔風校」）徹底ぶりであった。八千卷楼は次第に世間の評価をかちえて、清季四大蔵書家の一に数えられるまでに充実する。しかし、丁丙没した後、その子孫が事業に失敗し、巨額の負債を返済するために蔵書を手放すに至り、光緒33年（1907年）、価格7万余元で江蘇省国学図書館（現南京図書館）の購入するところとなった。

八千卷楼は複数の楼からなり、もとの八千卷楼に対し、その後増築された2楼を「後八千卷楼」、「小八千卷楼」（この楼には「善本書室」と書かれた扁額がかかっていたところから、

この名で呼ばれることが多い)、これらを総称して「嘉恵堂」と呼ばれる。楼名は蔵書印記に反映されて、30以上を数える。

蔵書総数は15,532種(点)、204,255冊、刊行の時代では明刊本、四部の中では集部が相対的に多く、一部日本刊本も含まれる。

#### e. 沢存書庫 ― 南京図書館における日本古典籍収蔵源流の二

1940年代に建立された沢存書庫は、日中戦争末期に南京に成立した汪兆銘傀儡政府の内政部長であった陳群の蔵書楼である。陳群は1890年福建省に生まれ、民国初頭渡日し、明治大学、東洋大学に学ぶ。民国9年(1919年)帰国後孫文に登用され、広州で大元帥府秘書、武漢で中央執行委員会及び国民政府聯席會議国民党代表等を歴任、1938年、汪政権内政部長に就任、抗日戦争後、1945年自害する。蔵書を含む個人財産は国民党政府の没収するところとなり、沢存書庫は当時の国立中央図書館の所蔵に帰した。「沢存書庫」の名称は『礼記』「父没而不能読、手沢存焉」に由来し、汪の命名という。『沢存書庫書目』(初編・次編)によれば、日本刊本が1000点余含まれる。(以上、王宝平氏の教示による)

#### f. 冢田子常<sup>つかだしじょう</sup>旧蔵書 ― 南京図書館における日本古典籍収蔵源流の三

冢田子常<sup>つかだしじょう</sup>は江戸後期の信濃の人で、『傷寒論一家言』を著し、俳人一茶の父を診察した医者である。子常は号であり、名は経、ほかに道有、百里、納斎、調斎とも号する。父の旭嶺は新井白石や室鳩巢に学んだ儒医として知られ、弟の冢田大峯は、尾張藩主の侍講をつとめた大儒であり、異学擁護派を称する寛政五鬼の随一として、寛政異学の禁に激越に反駁したことで有名である。(岩波書店『国書人名辞典』)

冢田子常<sup>つかだしじょう</sup>の旧蔵書が南京図書館にある、との情報は南京図書館との交流事業を進めている石川県立図書館のスタッフからもたらされた。1999年、同人が南京図書館を訪れた折りに供覧された一書に「子常図書」なる蔵書印を確認したことからである。残念ながら、今般の調査では確認できず、今後の調査を待つことになる。

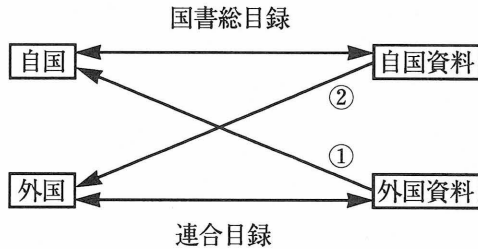
「子常図書」なる蔵書印を持つ一書は和刻本漢籍らしかった、という以外に同人の記憶は定かでなく、その一書がたまたま冢田子常<sup>つかだしじょう</sup>旧蔵であったに過ぎないか、冢田子常<sup>つかだしじょう</sup>旧蔵書が一括して南京図書館に所蔵されているのか、も現状でははっきりしない。戦後、東亜同文書院や満鉄関係の資料を含む一定分量の日本書が南京図書館に寄贈されたらしいこと、その中の一部である可能性等について、さらに追求する余地がある。

冢田子常<sup>つかだしじょう</sup>のご子孫に連なる方が現在長野市に在住されており、南京図書館への寄贈の事実について確認したが、判明するに至らなかった。ゆかりの方が逗子市に在住されている由だがまだ事情をたずねる機会を得ていない。この方面からの調査も続けていく予定である。

## 3. 総括と展望

## a. 外国現地調査のための戦略論 — 資料（古典籍・古籍）vs. 所在国モデル

海外に伝存する日本古典籍の調査を行う場合を想定し、所蔵国と所蔵資料の関係を、調査・目録化の契機を設定するニーズとの関連で図式化してみれば、次の如くである。



自国を日本、外国を中国とすると、平行双方向矢印は日本に日本古典籍が、中国に中国資料が存在する、自然の関係を示すに過ぎず、当面問題はない。それぞれが自国資料の総合目録（『国書総目録』、各種連合目録）を編纂しているわけで、当然ながら最もニーズが高い。

問題はクロスする矢印①、②である。自国に外国資料があり、自国資料が外国にあるケース、すなわち日本に漢籍が、日本古典籍が中国に所在する場合である。この場合、①と②のいずれがニーズが高いかは即断できないが、現物がある強みから①が目録化の契機としては有利である。従って、所蔵する図書館等の蔵書目録に収録されるか、相当の分量があるときは別に独立した目録が編まれることになる。漢籍を所蔵する日本各地の図書館・文庫の蔵書目録に漢籍が収録される例が前者であり、内閣文庫や国会図書館の漢籍目録が後者の例である。①のニーズは、自国を日本とした場合、日本の中国文学、中国史研究者が、自国を中国にすれば、中国の日本学研究者によって担われる。

②は今回の南京図書館所蔵日本古典籍調査のように現物を求めて外国に調査するケースであり、目録化の契機、ニーズは専ら日本の国文学、国史研究者等の間に浮上する。①と②は相対的な関係にあり、自国を日本とするか、中国とするかで互いに入れ替わる。

理想的に言えば、①で作成された目録等を、②の調査で検証、補完する体制こそ望まれる。つまり、中国側の日本学研究者のニーズから中国所在の日本古典籍目録が作成され、その目録が日本の国文、国史研究者に対して現物調査のインセンティブを与え、両国の研究者の協力の下に現地での現物調査が実現される、という階梯である。しかしながら、所蔵機関の性格次第では外国資料へのニーズは希薄であり、蔵書目録の当面の対象外になりかねない事態もあり得る。研究者のイニシアティブが要請されるところである。

## b. 総括と展望

海外における現地調査にはいくつかのハンデがつきまとう。国内ほど頻繁に出かけるわけには行かないこと、調査日数が限られること、こうした書誌調査には不可欠な工具書がどうしても充分でないこと、言葉の壁があること、他にも慣れぬ現地での行動に円滑を欠き、思わぬ時間の徒費を招きがちなこと、等々である。ハンデは焦りと呼んで、最少の時間で最大の成果をあげたいという現実を無視した行動に駆り立てがちになる。調査される側の事情をあまり顧慮せず、調査する側の勝手な都合を知らず知らずに押しつけ、特権的な便宜を安易に期待する傾向を生む。遠路をおしてはるばると、わざわざ足を運んだのだからそれなりの対応を期待しても罰は当たらない、といった、人情頼みの甘えが働かないとは言えない。

今回の三次にわたる南京図書館の現地調査を顧みたときに、上述の傾向から免れていたか、という反省に似た問いを発せざるを得ない。一次、二次の調査は専らカード目録の検索に止まり、現物を手にした書誌調査は第三次にしてようやく実現した。実現の背後には傅、張、王の三先生が我々の調査に参加していただくというご協力があった。

調査される側に立ったとき、南京図書館古籍部の宮副館長の談は説得的だった。南京図書館は公共図書館であり、その第一の使命は南京市民ほかの利用者のニーズに応じてサービスを提供することにある。当然のことである。日本語資料一般に対する利用者のニーズは皆無とは言えないまでも、日本語資料のうち我々の調査対象たる日本古典籍へのニーズは限りなく皆無に近い、とみるのもうなずける話である。ニーズの高いものから優先的に処理され、サービスに供されるのは、限られたスタッフで利用者のニーズに応えた一定の質のサービスを提供しようとする場合の不可避的な対応である。南京図書館が進めている蔵書目録のデータベース化に、日本古典籍が除外されているとしてもけだし当然である。

三度目にしようやく現物を手に取ることができたことは、感謝すべきことではあっても不満に感じることはない。調査する側のエゴイスティックな悪しき傾向にからめ取られないためにも、不満に感じることはない。

ここで思い起こされるのは、九州大学の研究者によるソウル大学中央図書館所蔵日本古典籍調査のことである。日本統治時代の旧京城帝国大学の蔵書を引き継いだソウル大学中央図書館は、江戸時代以前の古典籍、約5000種、3万冊を所蔵し、中には十返舎一九、式亭三馬の新出資料も含まれる注目すべき蔵書である。複雑な対日感情もあって、日本側にはほとんど公開されてこなかったのを、ひとりの研究者が1979年以来、調査の許可を求めて20年近く毎年のように訪れた努力が実った結果だと聞く。

海外の現地調査の前提は、調査する側とされる側との間の、時間をかけた信頼の醸成であることをあらためて認識させられる話である。この前提に立てば、今般の南京図書館現地調査はようやく始まったばかりであり、今後さらに時間をかけて双方の信頼関係の基盤を強化し、地道に進めていく必要があると思われる。

番号	書名	著者	出版地	出版社	出版年	冊数	備考	備考2
	九経談	錦城先生(大田錦城)	江戸	多稼軒	文化甲子	4		
30982	廣惠齋急方	(日)丹波元愆編		躋寿館刻本	寛政1	3	三卷	
30223	業治通義	(日)丹波元堅撰			清光緒10(1884)		十二卷	楊守敬重印
31333	傷寒論述義	(日)丹波元堅撰	日本東京	青雲堂刻本		3	五卷補一卷	
30223	傷寒廣要	(日)丹波元堅撰	日本東京	青雲堂刻本			十二卷	聿修堂医学叢書
30410	金匱要略述義	(日)丹波元堅撰		刻本	嘉永7(1854)	2	三卷	存誠齋室叢書本
31394	素問識	(日)丹波元簡撰		刻本		8	十一卷	抄本
32422	救急選方	(日)丹波元簡撰		聿修堂再刻	文化7(1810)	1	二卷	巾箱本
30408	金匱要略輯義	(日)丹波元簡撰		聿修堂刻本	文化11(1814)	10	三卷	
32724	金匱玉函要略輯義	(日)丹波元簡撰		聿修堂刻本	文化8(1811)	10	六卷	
31477	脈学輯要	(日)丹波元簡撰		聿修堂刻本	寛政7	1	三卷	
32786	黄帝八十一難経疏證	(日)丹波元胤		聿修堂刻本		1	二卷	
32192	業徴	吉益東洞撰		蒲蘆亭刻本	天明5	3	三卷	
30818	業徴	吉益東洞撰		刻本	文化9	3	三卷	
30385	傷寒論張義定本	伊藤大助		刻本	文政1	2	二卷	
38765	制度通	伊藤長胤撰		施政堂刻本	寛政8(1796)		十三卷	
30406	金匱要略註解	名古屋玄医		刻本	元禄9(1696)		二十三卷	
32794	重訂解体新書	杉田翼訳 大槻茂賢 重訂		東都書肆 千鐘房刻本	文政9	13	十二卷首一卷	
31244	藤氏医談	近藤明隆昌著		刻本	享和壬戌(1802)		二卷	
30282	医余	(日本)尾台逸		学思齋刻本	文久3(1863)	3	三卷	
30283	食療正要	松岡玄達	日本	刻本	明和	4	四卷	丁書
30007	医宮玄稿	(日)望三英著 望元泰輯校		刻本	宝暦3(1752)	4	三卷	
30798	神農本草経	(日)森立之重輯		森氏業室刻本	嘉永7(1854)	3	三卷考異一卷	
31753	脚気類方	(日)源養徳撰		刻本	清光緒1	2	一卷附録一卷	
30515	脚気類方	(日)源養徳撰		刻本	宝暦13		一卷附録一卷	内箱本
10159	七経孟子攻文並補遺	(日本)山井鼎輯			清嘉慶2(1797)			
53711	日本文徳天皇実録	(日)基経等奉勅撰	日本	刻本		10	十卷	
49514	東江先生書話	橋圭橘輯	日本	刻本		1	二卷	存一卷、下卷
30722	断毒論	橋本徳伯著		竹蔭医寮刻本	文化11	2	二卷	
91751	晚翠堂文詩稿	橋本惟孝撰	日本	刻本		4	十卷	
30380	傷寒論分註	橋春暉述		刻本	寛政3	1	一卷	
49525	山水画譜	橋守国絵		尾陽書肆文光 堂刻本	元文5(1740)	2	二卷	
54338	日本外史	頼養撰		頼氏家刻本	文政12(1829)	12	二十二卷	
59779	日本外史	頼養撰		刻本	嘉永1(1848)	22	二十二卷	
38742	日本外史	頼養撰	日本	刻本		10	二十二卷	存二十卷 一至十
802837	山陽先生書後	頼養撰	日本	三書堂刻本		3	三卷	
801288	山陽詩抄	頼養撰		書林五玉堂刻本	天保4(1833)	1	二卷	
53710	新策	頼養撰		刻本	安政2(1855)	5	六卷	
54351	日本政記	頼養子成撰		刻本	文久1(1861)	8	十六卷	
495024	本朝画史遺伝	檜山義慎撰		二書堂刻本	嘉永3	5	五卷	
85330	谿山続夢	斎藤謙編	日本	刻本		1	一卷	



番号	書名	著者	出版地	出版社	出版年	冊数	備考	備考2
802088	文話	齋藤謙撰		古香書房刻本	文政12 (1830)	4	十六卷	
30800	本草經	渋江籊籊著	日本			1	三卷	
35592	日本後紀	藤原朔 冬嗣等撰	日本	刻本		9	存九卷五八十二至四十七二十至二十二	
38806	詩仙堂志	藤原成烈輯		刻本	寛政9 (1797)	4	四卷	
49528	好古小録	藤原貞幹撰	京都	津逮堂刻本	寛政1 (1794)	2	二卷	
49529	好古日録	藤原貞幹撰	京都	津逮堂刻本	寛政8	2	二卷	
72595	弘道館記述義	藤田彪撰		刻本	慶応2	2	二卷	
46242	辺氏画譜	辺瑛編輯	江戸	書肆金花堂刻本	文化3	4存3卷		
72992	候鯖一鱒	亀田文佐衛門輯 亀田保補		善身堂刻本	天保13 (1842)	5	五卷	
351022	和漢年契	題蘆屋山人撰		浪速書肆宜英堂刻本佚名批	天保2 (1831)	1	不分卷	
72320	劉向談苑纂註	関嘉撰		興芸館刻本		10	二十卷	
49554	行書類纂	関克明 関思亮輯		刻本	天保4	12	十二卷	
72715	七書正義	関重秀撰	大阪	書林田中宋榮堂刻本	元治1	5	七卷	
92848	經史論	関義臣編		明治堂刻本		15	十五卷	
72758	三十三過本作法纂解	釈慧晃撰		刻本	貞享1	3	三卷	
72625	阿弥陀因行記	釈慧空撰		刻本	正徳6	2	二卷	
72649	俱舍論明眼鈔	釈珍海撰		杜多中衢刻本	天保10	6	六卷	
73038	天台伝仏心印記箋要	釈天謙撰		釈亮潤刻本	享保16	1	一卷 附幽溪伝仏心印記註指謬一	
19326	梅嶺禪師王山偶詠	釈元健輯	日本	刻本		1	一卷	
72728	龍溪禪師心経口譚	釈元澄撰	日本	刻本		1	一卷	
72623	光明真言金壺集	釈蓮体撰	京都	文政堂刻本		1	一卷	
72587	唯識義章	釈真興撰	日本	刻本		6	二卷	
72858	仏果円悟禪師碧巖集種電鈔	釈大智撰	京都	文求堂刻本	元文4	存冊	十卷存8卷二至四六至十	
72820	瑜伽師地論釈略記	釈大含撰			文化2	2	二卷	稿本
73029	悉曇字記林記	釈睿僧正撰		刻本	享保17	1	一卷	
72712	祇陀大智禪師偈集	釈光徹等輯		駿河国大雲禪院刻本	延享4	1	一卷	
73032	伝教大師将来目錄	釈最澄輯		釈正超刻本	文化4	1	二卷	
72334	壁生草	釈白隠撰		東都至道庵刻		2	二卷	
100524	元亨釈書	釈師鍊撰		刻本	寛永1	10		
72616	勸発菩提心偈	題(日本) 關提窟侍者某撰	日本	刻本		3	一卷附御恒案一卷清漢草二卷	
96459	武芸小伝	(日本) 日復繁高撰	日本	刻本	享保1 (1716)	5	十卷	
72420	近世叢談	(日) 土屋弘撰	日本	鉛印本		1	一卷	
72951	大藏却論	(日本) 釈道契撰	日本	尾張書肆其中堂刻本	文政11	3	三卷	
72968	大藏輔國集	(日本) 釈宗興撰	日本	京師書肆永田調兵衛刻本	明治2 (1869)	1	三卷	
49504	本朝画史遺伝	(日本) 松山義慎撰	日本	二書堂刻	嘉永3	5	五卷	
72598	大日経住心品疏玉振抄	(日本) 釈法住記	日本	大伝法院刻本	享和2 (1802)	9	九卷	
72282	大日経開題鈔	(日本) 釈空海撰 釈有快輯	日本	高野山金剛峰寺宝蓮院刻本	嘉永1 (1848)	1	一卷	
73037	大毘盧遮那成道経	(日本) 釈円珍撰	日本	額田一止人刻本	明和9 (1773)	1	心目一卷 大日経疏抄一卷	
72628	大乘法苑義林章要述	(日本) 釈快道撰	日本	抄本		3	三卷	

番号	書名	著者	出版地	出版社	出版年	冊数	備考	備考2
53923	台湾鄭氏紀事	(日本) 川口長孺編	日本	刻本		2	三卷	
49383	珍錢図録	(日本) 久野克寛撰	日本	京都書林藤井文政堂刻本	文化4 (1807)	1	一卷	
49384	錢幣考遺図象	(日本) 久野克寛撰	日本	刻本	文化4 (1807)	1	一卷	
73036	荀子増註	(日本) 久保愛撰	日本	平安書肆水玉堂刻本	文政8 (1825)	10	二十卷	
48101	淳化祖帖釈文	(日本) 小島知足撰	日本	中郷翰香館刻本	天保15 (1844)		二卷	
72805	六合釈精義	(日本) 釈快道撰	日本	浪華書林豊山書林刻本	寛政10 (1798)	2	二卷	
49378	改正珍貨孔方図鑑	(日本) 小沢辰之輯	日本	刻本		1	一卷	
78280	唐明詩学解環	(日本) 井以道 松直一輯	日本	刻本	寛政2 (1790)	1	一卷	
30379	復古傷寒論微	(日本) 天泰獄著	日本	刻本	安永9		七卷	
100121	名数画譜	(日本) 天元果野編	日本	刻本	文化7 (1810)	4	不分巻	
72623	光明真言金童集	釋蓮體撰		日本京都文政堂刻本		1		
18796	同人集	大沼厚輯	日本	枕山詩屋考詩閣刻本	嘉永3年 至安政2	6	二巻二編二巻 三編二巻	
72989	成唯識論略解	釋良光撰	日本	釋義山刻本	元禄11年	10		
355964	傳疑小史	中井積徳撰	日本	巻懷刻本	嘉永3年	1		
2124	甘雨亭叢書	板倉勝明輯	日本	安中板倉氏刻	天保13年	32	十九種四十六巻	書名カードなし
368	甘雨亭叢書	板倉勝明輯	日本	安中板倉氏刻		48	六集四十九種	書名カードなし
2201	甘雨亭叢書	板倉勝明輯	日本	安中板倉氏刻	弘化2年	16	初集六種八巻 二集四種九巻	書名カードなし
72468	世説講義	田中頤撰	日本	刻本	文政6年	8	存八巻 三至十	書名カードなし
72469	清俗紀聞	中川忠英撰	日本	竊思館	寛政11年	6	十三巻	書名カードなし
99602	清俗紀聞	中川忠英撰	日本	刻本	寛政11年	6	十三巻	書名カードなし
49337	積古斎和漢稀世銭譜	中川泉壽輯	日本	青木嵩山堂刻		2	一卷、追遺 圖鑑一卷	書名カードなし
49382	孔方圖鑑	中谷願山撰	日本	(清雍正四年) 大坂刻本	享保13年	1	一卷	書名カードなし
49381	珍貨孔方鑑	中谷願山撰	日本	大坂刻本	享保14年	1	一卷	書名カードなし
32716	青囊瑣探	片倉元周撰	日本	靜儉堂刻本	享和元年		二巻	書名カードなし
30550	徽纈新書	片倉元周	日本	刻本	天明	2	二巻	
32768	統眼科錦囊	本莊俊篤撰	日本	江都書林	天保8年	2	二巻	
30014	歴代醫家姓氏	石丸源藏輯	日本	抄本	安永3年	1	不分巻	
94090	易原	平安皆川恩撰	日本	刻本	文政元年	2	二巻	書名カードなし
31060	北山醫案	北山反松著北山道修編	日本	刻本	延享2年	3	三巻附録一卷	書名カードなし
38778	職原鈔	北畠親房	日本	刻本		3	二巻	
49532	紫川館藏書畫落款譜	竹田立浦輯	日本	刻本	寛政5年	3	三巻	
30281	頤生輯要	竹田定直編	日本	刻本	寛政3年	5	五巻	
21078	周易経翼通解	伊藤氏撰	日本	古義堂刻本	安永3年	4	□□巻/缺四巻 缺十三至十六	
53321	古事記	安萬侶撰	日本	刻本	寛政11年	3	三巻	
72956	言志晩録	佐藤一斎撰	日本	有乎爾齋刻本	嘉永3年	1	一卷附別存一卷	
21044	易学諺解	佐久間順正	日本	刻本	安政2年	2	二巻	
57712	金銀圖録	近藤守重輯	日本	刻本	文化7年	7	六巻附一卷	
49193	金銀圖録	近藤守重輯	日本	正齋刻本	文化7年	7	六巻附一卷	
250571	律詩韻函	沖穆清風編	日本	京撰書林刻本	天保15年	5	五巻	
53274	国語定本	尾張泰鼎定本	日本	岡田羣玉堂刻	嘉永7年		二十一巻	
72399	劉向新序纂註	武井驥撰	日本	刻本	文政6年		十巻	

番号	書名	著者	出版地	出版社	出版年	冊数	備考	備考2
72398	劉向新纂註	武井驥撰	日本	東都書肆尚古堂刻本		4	十卷	
18703	古詩韻範	武元貫輯	日本	大坂群玉堂刻	文化9年	3	五卷首一卷	
23110	古詩韻範	武元貫輯	日本	東京書肆水文堂刻本	明治13年	1	五卷首一卷末一卷	
53123	皇朝史略	青山延子撰	日本	含金雪樓刻本	文政9年	5	十二卷	
53124	皇朝史略	青山延子撰	日本	文昌堂刻本	文政10年	6	十二卷	
39785	統皇朝史略	青山延子撰	日本	水滸青山延家塾刻本	天保2年	1	三卷	
353958	明徹録	青山延子撰	日本	鐵槍斎刻本	文化14年	7	十卷	
71501	古梅園墨譜	松井元泰撰	日本	刻本		1	一卷	
802261	歐蘇手簡後編	松本慎編	日本	刻本	寛政9年	1	二卷	
97122	国朝佳節録	松下見林編	日本	刻本	貞享	1	一卷	
250462	縮刻唐開成石經	松崎明復由定	日本		天保15年	37	十二種一百五十八卷附五經文字三卷九經字樣一卷	
40466	彙刻書目外集	松沢老泉編	日本	慶元堂刻本	文政3年	6	六卷補遺一卷	
77829	松陰先生武教講録	松陰撰	日本	京都文求堂刻		2	二卷	
72680	松陰快談	長野確撰	日本	鉛印本		1	四卷	
72464	小学書合纂	昌谷碩輯	日本	考槃莊刻本	安政4年		四卷	
23785	毛詩品物圖改	岡元鳳撰	日本	浪華四書坊刻	天明4年	1	七卷	
38757	唐土名勝圖會	岡田玉山撰	日本	刻本	文化2年	6	第一集六卷	
54349	日本外史補	岡田僑撰	日本	刻本	嘉永3年	9	十四卷	
53521	名節録	岡田僑撰	日本	刻本	嘉永3年	3	三卷	
53520	名節録	岡田僑撰	日本	刻本	慶応2年	3	三卷	
53511	史記鱗	岡白駒	日本	浪華合書房刻		5	十卷首一卷	
21556	左傳鱗	岡白駒輯	日本	刻本	宝暦10年	5	十卷	
22330	孟子解	岡白駒輯	日本	刻本	宝暦12年	7	七卷	
95743	明史三傳	岡華玉書肆編	日本	刻本	嘉永5年	6	六卷	
72722	妙夢十周	知道上人	日本	大悲山夢芻瑞幢刻本	文政4年	2	十二卷	
91746	徂徠集	物茂脚撰	日本			19	三十卷補遺一卷	○
21713	論語徵	物茂脚著	日本	刻本	宝暦12年	5	十卷	
72500	辨名		日本	刻本	寛政元年	2	二卷	
76933	海外新書	物茂脚撰、清錢泳編	清	刻本		1	五卷	
803779	四家雋	物茂脚編	日本	土屋英明餐霞館刻本	宝暦11年	6	六卷	
49380	奇抄百圓	河郡羽積撰	日本	刻本	寛政元年	1	一卷	
49379	寛政孔方鑑		日本	刻本	寛政6年	1	一卷	
72550	涓吉龟鑑	南元裳	日本	刻本	文化4年	2	上編一卷下編一卷	
79973	名疇	皆川恩撰	日本	京都書肆錢屋七郎兵衛	天明8年	6		
54312	先哲叢談	原善撰	日本	武阪府書林刻	文化13年	5	八卷附年表一卷	
54313	先哲叢談	原善撰	日本	武阪府書林刻	文化13年	4		
54314	先哲叢談	原善撰	日本	武阪府書林翠玉堂刻本	文化13年	4	前編八卷	
97121	先哲叢談	原善公道撰	日本		文化13年	1	八卷	後編東條耕子撰
71271	先哲叢談		日本	刻本	文化13年	2	四卷	
91755	栗山文集	柴郡彦撰	日本	刻本	天保13年	5	六卷	

番号	書名	著者	出版地	出版社	出版年	冊数	備考	備考2
21282	毛詩正文	兼山評點	日本	刻本	天明8年	4	三卷	
30984	金蘭方	菅原岑嗣	日本	刻本	文政9年	5	二十二卷	
30508	温放秘録	野喬伯遷撰	日本	刻本	宝暦8年	4	七卷	
53829	新撰年表	清宮秀堅輯	日本	刻本	安政2年	1	不分卷	
800168	靖献遺言	浅見安正輯	日本	京都風月堂刻		2	八卷	存六卷
72813	昭代逸事初集	鈴木尚撰	日本	三都書林刻本	嘉永6年	1	一卷	
23126	四書訓蒙輯疏	會沢安 <del>義</del> 撰	日本	刻本	嘉永元年	28	二十九卷	存二十八至七十九至二十九
152941	大日本史	源光國修	日本	刻本	文化7年	100	二百四十三卷	
38755	先哲象傳	德齋原義撰	日本	文光堂刻本	弘化元年	4	四卷	
72664	經典餘師詩經	讀岐百年撰	日本	大坂書林 <del>柳</del> 原刻本	嘉永2年	11	八卷	